わたしの聖戦（ジハード）

◎◎女性が働くということ◎◎ 93

医学ジャーナリスト・医学博士　植田美津恵

見えないお金

現金ではなく、あらかじめ入金（チャージ）しておいたカードで買い物をする方法が一気に普及してきた。電子マネーの一形態である。

調べてみると、電子マネーとは電子情報通信を活用した決済サービスのことらしく、プリペイドカードやクレジットカード、キャッシュカードも広い意味では電子マネーの範疇に入る。

我々日本人が、カードを使って支払いをするという行為に慣れてきたのはようやくここ最近のことだ。今でも、現金で支払うことのほうがよほど安心感があるし、クレジットカードは使わないと決めている人は少なくない。しかし、社会全体が完全にアメリカ式考え方に支配され、クレジットカードが持ち主への信頼度を左右することがままあり、そうなってくるとクレジットカードがないことの不便さも日常感じることが多くなる。

近頃その拡大ぶりが目につくのは、電車やバスに乗る際に機械にかざすカードのほうだ。切符代以外にも、コンビニやスーパーなど比較的少額の場合に使うカードだ。これはクレジットカードとは異なるので、チャージしてなければ決済できないし、サインや暗証番号も必要なく、当然キャッシングの機能はない。

こういったカードの普及の理由は、いちいち財布から小銭を出す必要がない点だろう。よく駅の切符売り場の機械の前で財布とにらめっこしている人がいて、長蛇の列をなす要因を作っている場面を見かけるが、カードを使えばそのようなことは起きないだろう。また、忙しいコンビニのレジでも同じ。自分も店員もラクだし、見た目もスマートなのは間違いない。

新しいものが登場したときには、どんな場合でも戸惑いと過去へのノスタルジーがあいまって、多少の不安感にさらされる。クレジットカードで買い物するときも携帯電話も同様で、簡単便利なことをすぐに受け入れるのには少しの経験と時間が必要だ。しかしどんなに抵抗しても時代の波には逆らえず、いつのまにかそれナシの生活は考えられないようになっていく。文明の発達はそうやって人類をたぶらかしてきた。

日本にはじめて貨幣が登場したのは飛鳥時代にさかのぼる。それまでは欲しいものを手に入れる方法は物々交換しかなかったために、最初人々は価値がわからない貨幣を使うことに抵抗があったとか。そればかりか偽物もあらわれ、貨幣の流通は歴史上いったん途絶えてしまう。再び貨幣による市場が復活するのは中国との交易が盛んになってから、自給自足で政府が貨幣を供給するようになるのは徳川の時代に入って以後のことである。

便利なものには勝てないが、クレジットカードやキャッシュカードには常に犯罪とリスクがつきまとう。安易にキャッシングできるカードは本当に曲者だ。キャッシングといえば聞こえはいいが、要は借金のこと。言葉の言い換えで危険性が薄れてしまうのもうさんくさい話である。カード社会といわれて久しいが、効率の良いもの、簡単で便利なものほど疑ってかからねばならないはず、その感性さえすでに遠いものになり、お金そのものが目に見えないことで、物の価値さえわからないようになっていくのが心底恐ろしい。

イラスト・三浦義雄